

蒲生慶一先生を悼む

真島 一郎
MAJIMA Ichiro

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.24 (2022), pp.21–22.

蒲生慶一先生と親しくお話ができるようになったのは、私が AA 研から学部・大学院に所属を移したのち、とくに国際社会学部の運営を任された2019年以後のことです。たいてい夜おそい時間に、研究講義棟3階の執務室まで、蒲生先生はふらり立ち寄ってくださいました。人なつこい笑顔と巨躯が、なんの気兼ねもない感じで開け放しのドアから不意に現れるたびに、私はどれほど救われた気持ちになったことでしょう。来訪の用向きはどちらかといえば建前で、じつは私が不慣れな仕事に困り果てていないか、そして何か自分にも手助けができないかをたえず確かめにこられていたのだと思います。いちど厄介な案件で本当に私が息を切らしていた時、「関係の学内各部署とは私のほうでひととおり話をつけておいたので、もう大丈夫ですよ」と、前ぶれもなくひとこと告げに来てくださったその柔和な笑顔を、私は忘れることができません。仕事が生々しくなっている同僚への声がけにかぎらず、大事な単位を落として進級や卒業が危ぶまれる学生に対しても、蒲生先生はなんとか助け船を出せないか、たえず思案されていました。学内の誰に対しても、真の意味での「夜回り先生」になろうと努めておられたのではないのでしょうか。

一昨年の夏、高校生向け体験授業のご担当をお願いしたい、蒲生先生は長文のメールで、現在のご体調がややすぐれないことを記したうえで、それでも「自分が断ればべつの同僚

に負担がかかるので引き受けたい」との返信をくださいました。私は一読、あわててお詫びの連絡をさしあげたのですが、自分の甘えも含め、それが蒲生先生との最後の事務連絡になってしまったことが、悔やまれてなりません。

昨年3月26日、蒲生先生ご逝去の悲報にふれたのち、私はなにひとつ心の整理をつけられないまま、それでも4月からの新年度に臨むほかありませんでした。研究室に遺された品々のうちでも、蒲生先生がよくお召しになっていたフリースが椅子の背にさりげなく掛けられてある光景を直接目にして、現実から喪われたものの計り知れなさだけは受け容れなければと、息の詰まる思いもいたしました。蒲生ゼミ生の心のケアを願って教員有志が学生たちと対話の機会を設けたのちも、「今年も楽しみにしていた蒲生先生の経済学が春学期は閉講になっているが、どうしたのですか」という一般学生からの問い合わせは、しばらくのあいだ続きました。学生に役立つような文献をご自分の研究室に苦勞して取り揃えておかれた教育者としての故人の遺志を継ぐために、吉田ゆり子先生と大川正彦先生は、蒲生研究室の書籍情報が散逸しないよう、早い時点からご尽力をくださいました。蒲生先生の授業を受けたことのある学部生数名が、昨夏をかけて全書誌データの入力作業を敢行し、さらに田島陽一先生、出町一恵先生、内山直子先生が、この秋から冬にかけて専門的視点で重要文献を厳選してくださったお



蒲生慶一先生を悼む

かげで、今年度中には「蒲生文庫」200点が、本学附属図書館の経済学書架に移管される見通しです。

蒲生先生は「経済」学の知を、他者への気配りと心遣いからなる最も近い「済民」の思考へと拡充し、これをみずからの生そのもので体现されてきたのではないかと、私は昨年来、たいせつな交流の記憶をよすがにあらためて感じてきたしいです。

蒲生慶一先生のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

(2022年1月13日識)